

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用
Auther(s)	今田, 良信
Citation	ニダバ , 42 : 30 - 39
Issue Date	2013-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044744
Right	
Relation	



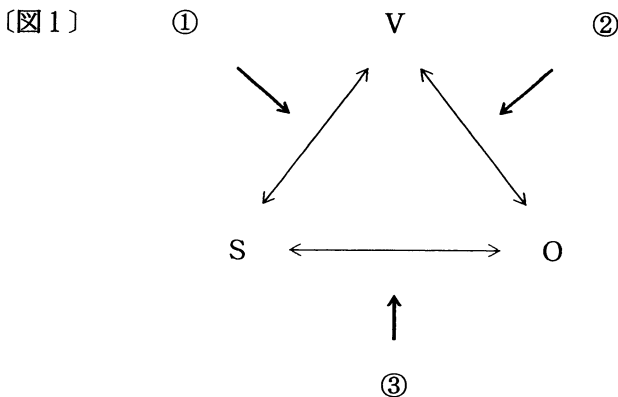
フランス語語順構造シフトの過程における 一般言語学的言語作用

今 田 良 信

0. はじめに

これまで筆者は、一連の論考、すなわち、今田(2009), (2010a), (2010b), (2012a), (2012b〔印刷中〕), (2013b〔刊行予定〕)を通じて、フランス語における — すなわち、古フランス語から現代フランス語に至る — 語順構造シフトの通時的方向性とその背後で働いていたと考えられるメカニズムについて、2つの点を明らかにしてきた。

そこで本稿では、これまでの考察を踏まえ、さらに少し視野を広げて一般言語学的観点から、古フランス語から現代フランス語に至る語順構造シフトの過程において、どのような言語作用が、節内基本語順の構成要素であるS（主語）／V（動詞）／O（目的語）の各要素間に働いていたと考えられるのかを、3つの要素間 — すなわちS／V間、V／O間、S／O間 — それぞれに分けて整理し、まとめておきたい。ここで言う「言語作用」とは、ある一定の方向性とか傾向性を持った一般言語学的あるいは言語普遍的な「力」ないし「働き」を指す。〔図1〕に示したように、①～③で表した太い矢印がそれぞれの要素間に働いた言語作用を表すことになる。

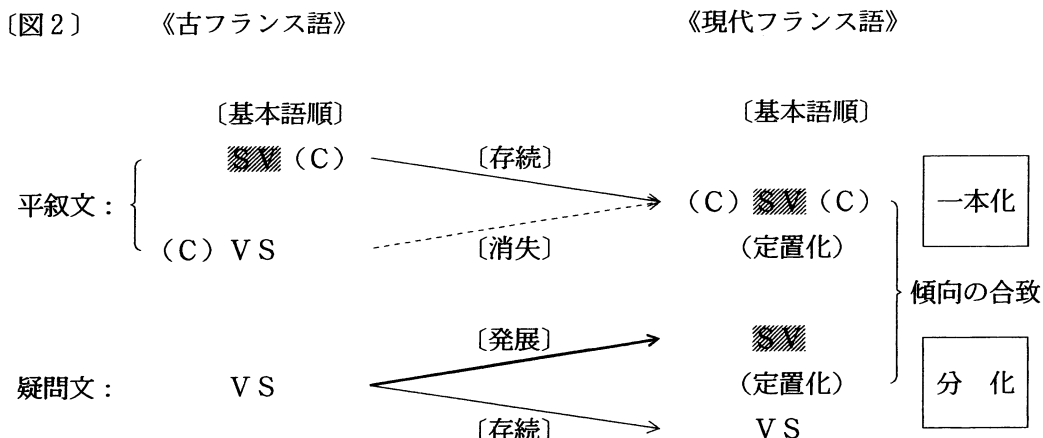


しかし、その前に先ず、一連の拙論でこれまでに明らかになった、2つの観点から見た語順構造シフトの通時的方向性と背後のメカニズムを、もう一度分かりやすく筋立てて、

簡潔に説明しておいたほうが良からう。

1. 平叙文と疑問文を併せたS/V語順構造シフトの通時的方向性と背景のメカニズム

1つは、今田(2013b)で扱ったもので、平叙文と疑問文を併せた語順構造の中で見られるS/Vによる語順構造シフトについて、通時的方向性は緩やかにVS優勢からSV優勢へとシフトしているが、全体として見れば、平叙文ではSV・VSからSVへの語順項目の一本化（収斂）によって、また疑問文ではVSからVS・SVへの語順項目の分化によって、VSとSV両者間の語順項目数のバランスを取ろうとするメカニズムが働いているように見えるというものである。これを図示したものが〔図2〕である〔SVとVSにコントラストを付けるため、SVにのみ網掛けを施した〕。¹⁾ 少なくとも、一本化と分化という反対方向に働く作用が同時並行的に起こっていたことは事実である。



Frei(1929), p. 41によれば、このような現象の根源について言語的「欲求(besoin)」というものによって、的確に説明している。

“Tout système de valeurs suppose un ensemble d’oppositions formées d’identités partielles et différences partielles. Les deux besoins opposés, mais solidaires, qui tendent en partie à assimiler les éléments les uns aux autres et en partie à les différencier, sont à la base de tout système de signes.”

「価値体系はすべて、部分的同一および部分的差異からなる対立の総体を予想する。すべての記号体系の根底には、いくぶんは要素をたがいに同化せしめ、いくぶんはそれらを分化せしめるところの、対立的な・しかし連帯的な二つの欲求がある。」〔小林英夫訳、下線部筆者、以下同様〕

筆者の言う「一本化」とは、上述のように、古フランス語の平叙文における「動詞第2位」の語順体系にあって、SVという語順項目とVSという語順項目が共存していたものが、VSの方は殆ど消失してしまい、SVの方だけが現代フランス語まで存続して来ていることを指している。従って、このことは広い意味での「同化」の一種と見て差し支えないものであって、Freiの言う「要素」を「語順項目」に置き換えてみれば、このフランス語における平叙文と疑問文を併せたS/V語順構造シフトの通時的方向性の事例も、Freiの言う「対立的な、しかし連帯的な」2つの — すなわち、同化と分化の — 「欲求」から発した、同時並行的な作用によって起こった一般言語学的現象の1つであり、そのメカニズムも上述のFreiの説明の枠組みの中で無理なく理解できるものと筆者は考える。

2. 語順類型論的観点から見た語順構造シフトの通時的方向性と背後のメカニズム

もう1つは、今田(2012a) で扱ったもので、節内基本語順におけるV/Oを含めた各主要語順パラメーター — 具体的には、他に、N（名詞）/A（形容詞）、N/Rel（関係節）、N/G（属格）、Ap（接置詞）/Nが含まれる — における構成要素の相対的順序について、通時的方向性は、古フランス語の時期までに既に過半数のパラメーターにおいて、いわゆるH（主要部）－D（従属部）型の順序が優勢であったが、古フランス語から現代フランス語に至る過程で、元はD－H型の順序であったそれ以外のパラメーターにおいても、全体として、この大きな、H－D型への流れの方向性に合わせて変化しようとするメカニズムが働いているように見えるというものである。少なくとも、実際の推移はその通りになっている。

もう少し詳しく言えば、古フランス語と現代フランス語とに形式的に大別すれば、古フランス語の段階で既にN/Aを除いた他のすべてのパラメーター値がH－D型ということになるのであるが、変化の時期をもう少し細かく分けて吟味してみると、古フランス語の時期までに過半数のパラメーター（すなわち、V/O、N/Rel、Ap/N）の値が既に揃って取っていたH－D型への方向性に合わせるかのように、それ以外のパラメーター（すなわち、N/G、N/A）の値も、時期の早い遅いの違いはありながら、推移して行った様子が見えて来る。

個別的に言えば、V/Oの相対的順序については、基本語順がラテン語ではSOV語順なのでD－H型（OV語順）であったものが、古フランス語では既にSVO語順のH－D型（VO語順）となっている。また、N/Gの相対的順序については、最古フランス語の時期には実はまだD－H型（GN語順）であったものが、²⁾その後、古フランス語の時期の間にH－D型（NG語順）へと変化している。³⁾そして、N/Aの相対的順序については、古フランス語ではまだD－H型（AN語順）であったものが、現代語では、主要語順パラメーターの中では最も遅れて、H－D型（NA語順）となっている。そして、最終的に、現代フランス語ではすべての主要語順パラメーターにおいて、揃ってH－D型の値が

取られているのである。

Sapir(1982), p.150および p.155によれば、このような現象を「定向変化(～駆流⁴⁾) (drift)」と呼んで、次のように説明している。

“Language moves down time in a current of its own making. It has a drift. ... The linguistic drift has direction. In other words, only those individual variations embody it or carry it which move in a certain direction, just as only certain wave movements in a bay outline the tide. The drift of a language is constituted by the unconscious selection on the part of its speakers of those individual variations that are cumulative in some special direction. This direction may be inferred, in the main, from the past history of the language.”

「言語は自ら造る潮流に乗って時間を下る。言語には「駆流」がある。〔中略〕言語の駆流は方向を持っている。いいかえれば、一定の方向に動く個人的変異のみがその駆流を具現し、またはそれを維持するのである。あたかもそれは入江の波の或る一定の動きのみが、その潮流の輪郭を示すに似ている。言語の駆流は、ある特定の方向に累加する個人的変異を、その言語の話者の側で、無意識の裡に選択することによって定められる。この方向は概して、その言語の過去の歴史から推断できる。」〔泉井久之助訳〕

また、田中、他編(1988), p.178 には、‘drift’について、

「言語を均衡のとれた形式へ向かわせる原動力。サピア(E. Sapir)の用語。言語のもつ強力な生命が、言語を一定の類型(type)へ駆り立てるという意味で、泉井久之助は「駆流」と訳したが「定向変化」という訳語もある。」

と説明されている。また、これは、フランス語では単に‘tendance」『傾向』と訳されているが、Dubois et al.(1973), p.484では、

“Dans la variation linguistique, on constate parfois que, pour des raisons peut-être difficiles à éclaircir, les changements ont comme une orientation commune, sont comme régis par une loi générale qu’on ne peut toutefois formuler avec précision: on parle alors de *tendance linguistique* ;”

「言語の変異において、おそらく解明困難と思われる理由によって、諸変化が共通の方向をもつようであり、明確には表明できないものだが、ある一般法則に規制されているようだということが時々みられる。その場合に〈言語の傾向〉という言い方がされる。」

〔福井芳男，他訳〕

と述べられている。以上のような指摘を踏まえて，この語順類型論的観点から見たフランス語における各主要語順パラメーターの語順構造シフトの通時的方向性の事例は，Sapirの言う「定向変化」という一般言語学的現象の典型的な1事例であり，その背後のメカニズムも Sapirの説明の枠組みの中で明確に理解できるもののように思われる。

3. S/Oに纏わる普遍的傾向について

以上，1. および2. に示した，2つの観点から見た語順構造シフトの通時的方向性と背後のメカニズムとは，結局のところ，その内容から見て明らかなように，前者はS/Vに纏わる事象であり，後者はV/Oに纏わる事象であった。そこで，あと1つ残るものはS/Oに纏わる事象ということになるが，フランス語の中でこの両要素間に見られる語順構造シフトであるとか，その通時的方向性という類のものは，少なくとも現在までのところ筆者には特に述べるべきものが見当たらない。ただし，古フランス語において，節内基本語順はSVOであり，それは現代フランス語においても変わらない。S/Oに関しては両者ともにSO語順である。従って，これだけの事実から導き出すことのできる語順類型論上の普遍性であるとか傾向と言えるものは，Whaley(1997)，p. 83にも紹介されているが，Greenberg による普遍性の第1番目 — と言っても，絶対的普遍性(absolute universal)ではなく，(強い)普遍的傾向((strong) universal tendency)としてであるが⁵⁾ — であろう。すなわち，

“Greenberg’s Universal 1: In declarative sentences with nominal subject and object, the dominant order is almost always one in which the subject precedes the object”

「グリーンバーグの普遍性1：名詞的な主語と目的語を有する平叙文において，支配的な配列順序は，ほとんど常に，主語が目的語に先行するものである」〔拙訳〕

というものである。これは語順類型論の最も大切なパラメーターである節内基本語順 — 文の構成要素S/V/Oの相対的順序 — の分布に関して見出されるものである。3つの構成要素からは，論理上可能な6つの型：SOV，SVO，VSO，VOS，OVS，OSSVが得られるわけであるが，実際には，世界の諸言語におけるこれらの型の分布には著しい偏りがある。例えば，Tomlin(1986)，p. 22に示されたデータでは，⁶⁾ 最初の3つの型 — SOV，SVO，VSO〔下線は筆者〕 — だけで全体の96%を占めるとされているが，それらはいずれも，上述のGreenbergの普遍性で指摘されているように，SがOに先行するものばかりなのである。

その理由について、Comrie(1989²), pp.20-21 によれば、次のように述べられている。

“Explanations for the predominance of word orders where the subject precedes the object seem more likely to have a psychological basis, in terms of the salience of the agent in the agent-action-patient situation, and the high correlation between semantic agent and syntactic subject:”

「主語が目的語に先行する語順が支配的であることに対する説明は、むしろ、心理的要因に求められるように思われる。すなわち、動作主から被動者へ動作が及ぶという状況における動作主の持つ顕著さ、そして意味的動作主と統語的主語との高い相関性という点から説明されるであろう。」

このような普遍的傾向の存在する理由については、なお念入りの検討の余地があるかもしれないが、少なくとも、古フランス語から現代フランス語に至るS/Oに纏わる関係については、フランス語だけに限らないSO語順の圧倒的優位性という人間言語の一般言語学的な力が働いていたことは否めないであろう。なお、この普遍的傾向によるフランス語語順構造シフトへのS/O間以外での更なる影響については、次節で触れたいと思う。

4. フランス語のS/V/O各要素間に働いていたと考えられる言語作用

以上、1. から3. において述べたことを踏まえ、古フランス語から現代フランス語に至る語順構造シフトの過程において、0. で述べた節内基本語順の構成要素S/V/Oの要素間それぞれに働いていたと考えられる一般言語学的な言語作用についてまとめておきたい。

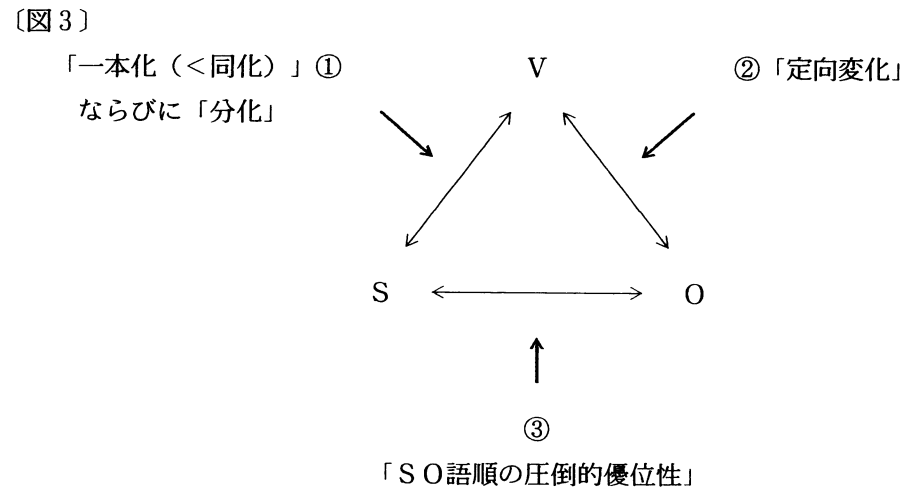
まず、①S/V間については、「一本化」(<「同化」)および「分化」という反対方向に向かう同時並行的な言語作用が働いていたと言うことができよう。ただし、「一本化」(<「同化」)の方は平叙文において、古フランス語の「動詞第2位」語順体系のSVC・CVSに由来するSV・VSという2つの語順項目に影響を及ぼし、SV1つへと収斂させ、「分化」の方は疑問文において影響を及ぼし、VS1つからVS・SVという2つの語順項目へ分かれさせる現象を生じさせたことになる。

次に、②V/O間については、「定向変化」という一定方向に向かう大きな流れへと言語諸項目を動かす言語作用が働いていたということが出来る。ただし、この作用が影響を及ぼしたのは語順類型論の各主要語順パラメーターにおける(構成要素の相対的順序の)値に対してであり、具体的には、H-D型へと向かう流れへと、元D-H型であった主要語順パラメーターの値をも駆り立てて向かわせる現象を生じさせたということである。V/Oというパラメーターの値について言えば、ラテン語ではD-H型(OV語順)であったものが、古フランス語では既にH-D型(VO語順)となっていた。しかし、これは、

V/Oがこの「定向変化」の流れに乗る時期が他の主要語順パラメーターより早かったというだけに過ぎず、このパラメーターにもそれ以前から「定向変化」という言語作用が働いていたことに変わりはないものと思われる。

最後に、③S/O間に働いていたのは、先にも述べたように、「SO語順の圧倒的優位性」という語順類型論上の普遍的傾向としての言語作用である。さらに、この作用は、S/V間に働いていた「一本化」 (<「同化」) と「分化」という同時並行的な言語作用と共に、古フランス語の「動詞第2位」の語順体系から現代フランス語の「SV定置化」の語順体系への語順構造シフトを助ける働きとして、影響を及ぼした可能性もある。すなわち、拙論(2013b)において筆者は、S/V語順構造の観点から見た語順構造シフトの通時の方向性とその背後に見られるメカニズムに関して、「疑問文については、古語では平叙文のSVC（基本語順：SVC）に対し、疑問文のマーカ―としてVS（書きことば≡話しことば?）が機能上の対照をなしていたが、平叙文のCVS語順に対してはその限りではなかった。従って、この部分は古語の語順体系において不安定要因になったとも考えられ、その場合、それが語順構造の変換を引き起こす一因となった可能性がある。」と述べたが、このS/O間の普遍的傾向は、その平叙文におけるCVS語順の消失を助長する力ともなったのではないかということである。

そこで、以上の点を踏まえ図に表したのが、〔図3〕である。



5. 今後の課題

前節の最後に述べた事例のように、各要素間に働くと考えられた①～③の言語作用はそれぞれ、当該要素間だけに影響を及ぼすのではなく、それ以外の要素間に働く作用とも有機的に連動して、その動向にも影響を及ぼす可能性を常に持っていると考えられる。その上で、別の要因なども複雑に絡み合い、重なり合って、全体として、言語体系内の様々な範疇や

現象を構成する諸項目どうしの間に、あるメカニズムが働き、言語構造のシフトやある一定の通時的方向性が生起してくるものと思われる。今回は、フランス語語順構造シフトの過程に的を絞って、節内基本語順の構成要素S/V/O各要素間に纏わる言語作用を問題としたわけであるが、今後は、さらに別の言語範疇や言語現象にも射程を広げ、その仕組みを観察して行きたい。

注

- 1) 〔図2〕におけるCは、補語(*complément*)を表し、直接目的補語、間接目的補語、状況補語を含む。従って、O(=直接目的補語)はCに含まれることになる。
- 2) 例えば、*pro Deo amur*「神(へ)の愛に賭けて」(842: *Serments de Strasbourg*『ストラスブールの誓約書』), *li Deo inimi*「神の敵ども」(881: *Séquence de sainte Eulalie*『聖女ユーラリの続誦』)〔事例のイタリック体は属格、以下同様〕。
- 3) 例えば、*La mort Perceval*「ペルスヴァルの死」(1230: *La Mort le roi Artu*『アーサー王の死』), *En nom Deu*「神の名において」(1225: *La Queste del saint Graal*『聖杯の探索』)。
- 4) 「駆流」は泉井久之助の訳語。
- 5) Comrie(1989²), p. 92 を参照。
- 6) 同書よれば、総数 402の言語を対象に行われた調査の結果、各語順型に含まれる言語数の実数(百分率)は、SOV: 180(45%), SVO: 168(42%), VSO: 37(9%), VOS: 12(3%), OVS: 5(1%), OSV: 0(0%)であり、S/Oの相対的順序についてSO型とOS型に分けると、S/V/Oによる上位3つの型が何れもSO型で合計385(96%)、下位3つの型が何れもOS型で合計17(4%)となっている。

参考文献

- 今田良信(1993): 「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — CV S語順対CS V語順を基準として — 」, 『ニダバ』, 22, pp. 80-91.
- 今田良信(1995): 「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」, 『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, pp. 31-45.
- 今田良信(1996): 「古フランス語における文頭の補語と語順」, 『ロマンス語研究』, 29, pp. 68-82.
- 今田良信(1998): 「古フランス語における文の肯定/否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語(句)とCV S/CS V語順との関係について — 」, 『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書, pp. 205-210.
- 今田良信(2002c): 『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 — 』, 溪水社.

- 今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」,『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から — 」,『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b):「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」,『ロマンス語研究』, 43, pp.21-30.
- 今田良信(2012a):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの — 」,『ニダバ』, 41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b):「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」,『ロマンス語研究』, 45, 10p.〔印刷中〕
- 今田良信(2013b):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの — 」,『ロマンス語研究』, 46, 10p.〔刊行予定〕
- 古浦敏生(2008):『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
- 田中春美, 他編(1988):『現代言語学辞典』, 成美堂.
- 樋口勝彦・藤井昇(2000):『詳解ラテン文法』, 研究社.
- Roberge, Claude, Solange内藤, Fabienne Guillemin, 加藤雅郁, 小林正巳, 中村典子 (2002):『21世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356項目 — 』, 駿河台出版社.
- Chaurand, J. (1987⁵): *Histoire de la langue française*, Paris: PUF.
- Combettes, B. (1988): *Recherches sur l'ordre des éléments de la phrase en moyen français*, Thèse pour le Doctorat d'Etat (Université de Nancy)
- Comrie, B. (1989²): *Language Universals and Linguistic Typology*, Oxford: Blackwell.
〔松本克己・山本秀樹訳(1992):『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房〕
- Dubois J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
〔福井芳男, 他編訳(1980):『ラールス言語学用語辞典』, 大修館書店〕
- Frei, H. (1929): *La grammaire des fautes: Introduction à la linguistique fonctionnelle*, Paris: Geuthner. 〔小林英夫訳(1973):『誤用の文法』, みすず書房〕
- Greenberg, J. H. (1966c²): *Universals of language*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Imada Y. (1997): La distinction affirmation/négation dans la phrase et l'ordre des mots en ancien français — Sur le rapport entre certains compléments circonstanciels en tête de phrase et l'ordre CVS/CSV — , *Studia Romanica*, 30, pp.9-16.
- Lehmann, W. P. (1974): *Proto-Indo-European Syntax*, Austin.
- Marchello-Nizia, Ch. (1995): *L'évolution du français: Ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris: Armand Colin

- Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.
- Sapir, E. (1982): *Language: An Introduction to the Study of Speech*, London: Granada.
- Tomlin, R. S. (1986): *Basic Word Order: Functional Principles*, London: Croom Helm.
- Whaley, L. J. (1997): *Introduction to Typology: The Unity and Diversity of Language*, London: SAGE Publications.